

大阪歴史博物館

大阪城内にあった大阪市立博物館に代わるものとして建てられた大阪歴史博物館(写真中央)は、難波宮跡(写真手前)に隣接し、難波宮跡の展示をはじめとする大阪の歴史が一覧できる博物館である。写真後方のNHK大阪放送局と一体構造として設計され、地下には遺構が保存・展示されている。

10階の窓からは難波宮跡の全景が展望できる。



難波宮跡と歴史博物館(中央)

- 55 **大村益次郎殉難碑**：明治2年(1869)兵部大輔に任ぜられ近代陸軍兵制の確立に努力していた益次郎は不平士族の反感を受け、同年9月京都で襲撃された。京都では治療が受けられず、この地にあった浪華病院(天王寺区上本町四丁目から移転)で右脚切断の手術を受けたがすでに手遅れであった。
(中央区法円坂二丁目、国立大阪医療センター南東角)
- 56 **難波宮跡**：大阪市立大学の山根徳太郎氏が昭和28年(1953)から生涯をかけて行った発掘調査によってその所在が明らかになった難波宮は、大極殿を中心に約1km四方に広がる。孝徳朝の難波長柄堂宮の跡に造営されたとされる天武朝の前期難波宮(686年焼失)と聖武朝の後期難波宮(726年造営)の2つの遺構が発見されている。
(中央区法円坂一丁目)
- 57 **越中井**：この付近は細川越中守忠興の邸跡で、越中井はその邸内にあった井戸とされる。慶長5年(1600)関ヶ原合戦の直前、忠興が家康に従い上杉攻めに出陣中、石田三成は在阪諸大名の家族を人質にしようとしたが、忠興夫人玉子(洗礼名ガラシャ)はこれに応じず、家臣に胸を突かせて37歳の生涯を閉じた。近くの玉造教会の聖堂正前にはガラシャ夫人の像がキリシタン大名として名高い高山右近の像とともに立っている。
(中央区森ノ宮中央二丁目12、道路敷内)
- 58 **玉造稲荷神社**(中央区玉造二丁目3)
- 59 **森之宮神社=鱈杜宮**(中央区森ノ宮中央一丁目14)
- 60 **森の宮遺跡**：縄文・弥生期の複合遺跡で、下部の貝塚からは海水産のマガキが、上層からは淡水産のセタシジミが出土、河内湾から河内潟、河内湖へと変遷する様子がよく分かる。また、縄文後期~弥生期の貝層から40歳以上と思われる男性の屈葬人骨や生活用品などが発見されている。
(中央区森ノ宮中央一丁目、ピロティホール内)

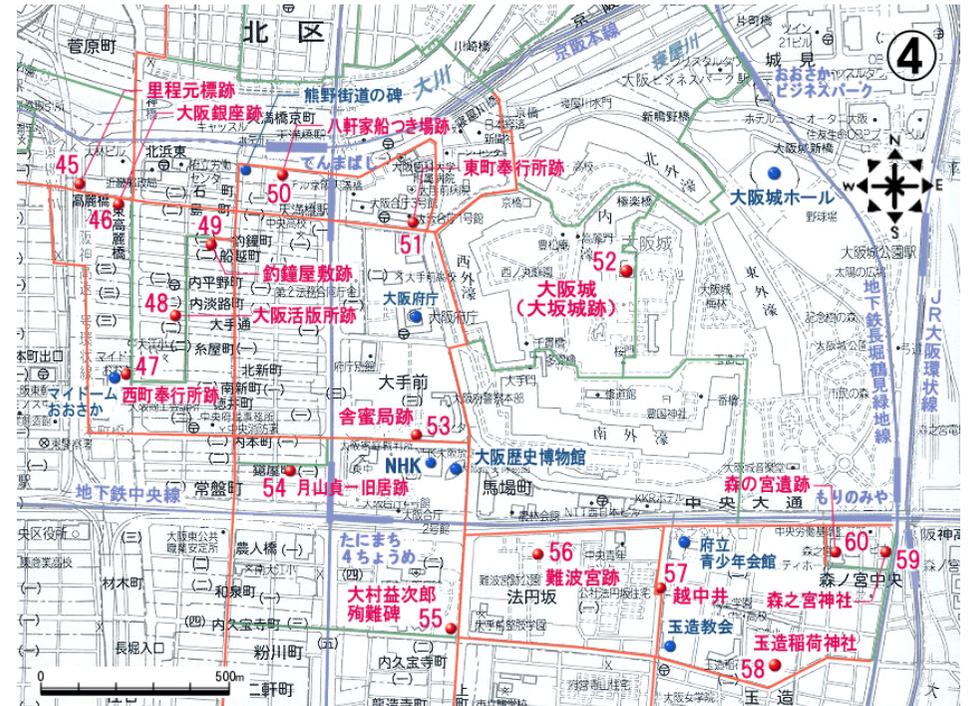


- 36 **御霊文楽座跡**：明治4年(1871)、西区の松島に移転した「稻荷社文楽座」は同17年植村家の手によりこの場所へ帰ってきた。大正15年(1926)、失火により焼失するまで続いた。
(中央区淡路町四丁目、御霊神社正面左)
- 37 **津村別院=北御堂**(中央区本町四丁目1)
- 38 **難波別院=南御堂**(中央区久太郎町四丁目1)

- 39 **芭蕉終焉の地**：元禄7年(1694)大阪に滞在していた松尾芭蕉は、この辺りにあった花屋仁衛門方離れ座敷に病臥、10月12日没した。51歳。なお南御堂境内には、辞世「旅に病んで…」の句碑がある。(中央区久太郎町三丁目6、御堂筋東側分離帯)
- 40 **稻荷社文楽座跡**：衰退していた人形浄瑠璃を蘇生させたのが植村文楽軒で、二代目のとき(文化8年、1811)ここに小屋を構えた。明治4年(1871)まで続いたこの小屋は「文楽軒の芝居」と呼ばれ、今日の「文楽」の名称のもととなった。(中央区南久宝寺町四丁目2、難波神社正面右)
- 41 **橋本宗吉糸漢堂跡**：大阪蘭学の祖 橋本宗吉は江戸でオランダ語を学び、帰阪後ここに蘭学塾「糸漢堂」を開いた。(中央区南船場三丁目3-23)
- 42 **住友銅吹所跡**：江戸時代、大阪は銅の精錬の一大中心地で、長堀などの堀川に面して多くの銅吹所(精錬工場)があったが、中でも住友の銅吹所は最も有名であった。(中央区島之内一丁目6-7)
- 43 **心学明誠舎跡**：「心学」は石田梅岩が享保14年(1729)に京都で唱えた教育運動で、平易な道話の形式の講義が人気を集め全国に広がった。大阪の明誠舎は、梅岩の孫弟子にあたる井上宗甫によって天明5年(1785)に開かれたもので、昭和13年(1938)まで当地にあった。(中央区島之内一丁目21-20)
- 44 **竹本座跡**：初代竹本義太夫が貞享元年(1684)人形浄瑠璃の小屋として開いたもの。最盛期は同じ道頓堀にあった角の芝居、中の芝居などとともに華やかな舞台を競った。人形浄瑠璃の衰退後は歌舞伎の小屋、さらに大衆演芸場(浪花座)と姿を変えたが、それも平成13年(2001)に閉館し、劇場としての長い歴史の幕を引いた。(中央区道頓堀一丁目8)

[4] 中央区北東部

- 45 **里程元標跡**：江戸時代、京街道・中国街道など大阪と各地を結ぶ道路の距離はここを基準に測られた。明治になって現在の道路法にあたる制度ができたときも引き続きここが基準点とされ、元標が建てられた。(中央区東高麗橋6、高麗橋東詰北側)
- 46 **大阪銀座跡**：銀座の起源は徳川家康が伏見に銀貨鑄造所を設けたのに始まる。時を同じくして大阪にも銀座が置かれたが、通貨の製造は行われず、主に生野(兵庫東)や石見の銀山から産出した銀を京へ廻送する役目を担っていたらしい。(中央区東高麗橋2-37)
- 47 **西町奉行所跡**：幕府直轄地であった江戸時代の大阪には東西奉行所があり、1箇月交替で執務した。はじめは東町奉行所の隣にあったが、享保9年(1724)の大火の後この地に移った。維新後この場所に府庁が置かれた。(中央区本町橋2、マイドームおおさか前)
- 48 **大阪活版所跡**：明治3年(1870)、五代友厚の懇請をうけた建築家 本木昌造が設計・創設した印刷所で、大阪の近代印刷はここから始まったといっよい。(中央区大手通二丁目4)
- 49 **釣鐘屋敷跡**：寛永11年(1634)三代将軍家光が大坂城へ来たとき、町中の地子銀(固定資産税)の永久免除を約束した。それに感謝して釣鐘をつくり町中に時を知らせた。釣鐘は明治3年(1870)に撤去され、府庁屋上に保存されていたが、昭和60年(1985)に元の場所に戻され、1日3回鐘の音を響かせている。(中央区釣鐘町二丁目2-11)



- 50 **八軒家船つき場跡**：古代、「渡辺の津」と呼ばれる港があったと推定されるこの辺りは、平安時代末には京からの四天王寺・熊野詣での上陸地点となった(熊野街道はここを起点とする)。江戸時代には三十石船が伏見との間に就航し、大いに賑わった。八軒家の名前は8軒の船宿があったことによるといわれる。(中央区天満橋京町2-10)
- 51 **東町奉行所跡** (中央区大手前一丁目、合同庁舎1号館南側)
- 52 **大坂城(大坂城跡)**：最初の大坂城は、蓮如が創建した石山御坊(本願寺)跡に豊臣秀吉が築いた(天正11、1583年起工)が、現在見られる城郭は徳川時代のもので、天守閣は昭和になって再建されたものである。
現在秀吉時代の城の姿を目にすることはできないが、最近の発掘調査で徐々に明らかになりつつある。(中央区大坂城)
- 53 **舎蜜局跡**：「舎蜜」はオランダ語の理・化学を意味する。明治2年(1869)に設立された大阪ではじめての公立学問所で、名のおり理・化学を教えた。明治22年(1889)には京都に移り、旧制第三高等学校、京都大学へとつながってゆく。(中央区大手前三丁目、大阪府庁新別館南館南側)
- 54 **月山貞一旧居跡**：大阪は江戸時代初期から国内有数の刀剣製作の地であった。貞一は幕末から維新にかけて大阪を代表する刀工で、明治天皇の佩刀や伊勢神宮の宝刀を鍛えている。(中央区錦屋町一丁目2)